

幼児教育における「センス・オブ・ワンダー」(2)

—『枕草子』にみられる小さきものへの慈愛を手がかりに—

福 田 豊 子

1. はじめに

環境問題の古典『沈黙の春』の著者レイチェル・カーソンは、作家であると同時に生物学者でもあった。自然や生命の美しさや不思議さに驚く感性を「センス・オブ・ワンダー」と名づけ、乳幼児の発達に不可欠なものであると説いた。カーソンの著書『センス・オブ・ワンダー』においてはエッセイという形を借りた教育論が展開されている。

幼児教育における「センス・オブ・ワンダー」概念の重要性について検討した前回の論考⁽¹⁾では、保育内容領域「環境」のねらいや内容が、「センス・オブ・ワンダー」概念と極めて類似していることが明らかになった。小学校1、2年生が学ぶ「生活」という教科が、幼児教育と学校教育の橋渡しをしていることから、身近な生活環境や自然環境と関わる中で育まれる「センス・オブ・ワンダー」が、幼児教育において重要な役割を果たしていることが確認できた。

以上のような前回の論考をふまえ、「センス・オブ・ワンダー」について、さらに考察を深めてみたい。前回はまず、乳幼児の発達にとって「センス・オブ・ワンダー」がなぜ必要なのかに焦点を当てながら、命の「不思議」に驚くことの意義を、仏典や詩などさまざまな文献の中から探った。その中で「センス・オブ・ワンダー」が人間の発達上、古今東西、普遍的に重要なものである可能性も示唆することができた。

乳幼児の発達にとっての重要性を検討した前回に対し、今回は幼児教育に携わる保育者にとっての「センス・オブ・ワンダー」の重要性に焦点を当てる。前回の論考と同様に、文献調査という方法で考察を続けたい。

2. 『枕草子』にみられる「センス・オブ・ワンダー」

(1) 四季折々の自然の描写

自然や生命の美しさや不思議さに驚く感性を「センス・オブ・ワンダー」というが、作者のもつ「センス・オブ・ワンダー」は、その作品に表れると考えられる。平安時代の中ごろ清少納言が記した『枕草子』には、季節による自然の移り変わりなど、四季折々の暮らしのひとこまひとこまが描写されている。約三百段で構成されているこの随筆には、作者の「センス・オブ・ワンダー」の表出が随所に見られる。

『枕草子』において頻出する「をかし」という形容詞には、「面白い」「興味深い」というだけでなく「趣がある」「風情がある」という意味がある。「をかし」は全文全訳古語辞典によると、「理知的に好奇心や興味を感じる情趣や、視覚・聴覚などで興味深くとらえた美をあらわす」と定義されている。

『枕草子』では自然そのものを「をかし」と捉えているが、季節ごとの風情を詠った第一段が、この随筆の最も有名な箇所である。

「春は曙。やうやうしろくなり行く、山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり。闇もなほ、ほたるのおほく飛びちがひたる。また、ただ一つ二つと、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕ぐれ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥のねどころへ行くとして、三つ四つ二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫のねなど、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおして、炭もてわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ゆるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし」

四季の自然の移ろいの美しさを描写した、この第一段を現代語訳すると、次のようになる。

「春は、明け方がよい。夜がほのぼのと明ける様子に趣がある。空が少しずつ白くなってゆくと、山の稜線あたりが少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいている様子には、風情が感じられる。

夏は夜がよい。月の見られる頃はもちろんである。闇の中でも、やはり、蛍が多く飛び交っているさまはなんともいえない。たった一、二匹の蛍が、ほのかに光りながら行くさまも趣深い。雨などが降るのにも、風情がある。

秋は夕ぐれの風情が味わい深い。夕日がさして山の端に近くなっていくところに、鳥がねぐらへ行こうとして、三、四羽、あるいは二、三羽、飛び急ぐさまにも風情がある。ましてや雁などが連なって、ずっと遠く小さく見えていくのは、本当に趣深いものだ。日が沈んでしまい、風の音や虫の声などを味わうのもまた、なんともいえず趣がある。

冬は早朝がよい。雪が降っていればもちろんのことである。霜が非常に白くてもそうでなくても、とても寒いからと火など急いでおこして炭を持ち運ぶのも、このようなときにはとても似つかわしい。しかし、昼になって、寒さが次第にゆるんでくると、火鉢の火も自然に白い灰が多くなり風情がなくなってしまう」

春夏秋冬、それぞれの季節における当時の生活の情景が目につく。日々の暮らしの中に見られる季節ごとの自然の美しさや風情を五感で捉えるその筆致は、作者の「センス・オブ・ワンダー」の豊かさを物語っている。清少納言は、春の曙を彩る紫の雲を眺めて心震わせ、夏の蛍の乱舞に酔いしれ、秋の夕ぐれ時、風の音や虫の声を味わい、冬の早朝には雪や寒さを楽しんだ。その感性はまさしく、「センス・オブ・ワンダー（生命や自然の美しさや不思議さに目を見はり驚く感性）」そのものである。

日本の四季折々の原風景を紡ぐ描写が、読む者の心に染み入り、読む者自身の「センス・オブ・ワンダー」が刺激されるのではないだろうか。自然の美しさや趣を感じる心、すなわち「センス・オブ・ワンダー」がなければ、自然の情景そのものを「をかし」と捉える視点はもちえない。

『枕草子』では、第一段から作者の「センス・オブ・ワンダー」が表現され、その後に続く段においても随所に見え隠れする。

たとえば、第八段では、天候や自然を背景にした月ごとの日々が次のように描かれている。

「正月一日、三月三日は、いとうららかなる。

五月五日、曇り暮らしたる。七月七日、曇り暮らして、夕がたは晴れたる空に、月いとあかく、星の数も見えたる。

九月九日、暁がたより雨すこし降りて、菊の露もこちたく、覆（おほ）いたる綿などもいたく濡れ、うつしの香ももてはやされて、つとめてはやみにたれど、なほ曇りて、ややもせば、降りおちぬべく見えたるをかし」

この第八段を現代語に訳すると、次のようになる。

「正月一日、三月三日は、のどかに晴れていたのがよい。五月五日は、一日中曇ったままでよかった。七月七日は日中曇っていて、夕暮れ時、晴れた空に、月がとても明るくて、星も見えたのが味わい深い。九月九日は、夜明けに近いころから雨が少し降って、菊についた露もわずらわしく、菊の香りを移すために花にかぶせた綿もひどく濡れ、香りも際立って、早朝には雨がやんでしまったが、なお曇って、また降ってくるような様子に見えるのも、風情があるものだ」

身近な生活のひとこまひとこまには、雲や風や空など、天候にかかわる事項や、山や野など自然にまつわる景色がちりばめられている。第一段と同様に、第八段にも、四季折々の自然の美しさや不思議さに驚き目を見はる清少納言の感性が表現されているといえよう。

（２）木に咲く花や草花の描写

『枕草子』の中には、特に植物の美しさを取り上げている箇所が、いくつか見られる。たとえば、第三十五段では、それぞれの季節における木の花の美しさについて語られている。木に咲く花の風情が次のように描写される。

「木の花は、濃きも薄きも、紅梅。桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝ほそくて咲きたる。藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、いとめでたし。

四月のつごもり、五月ついたちのころほひ、橘の葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花のなかよりこがねの玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたる朝ぼらけの桜におとらず。ほととぎすのよすがとさへ思へばに

や、なほさらにいふべうもあらず。

梨の花、よにすさまじきものにして、近うもてなさず、はかなき文つけなどにせず。愛敬おくれたる人の顔などを見ては、たとひにいふも、げに、葉の色よりはじめて、あいなく見ゆる、もろこしにはかぎりなきものにて、ふみにも作る、なほさりと、やうあらむと、せめて見れば、花びらはしに、をかしきにほひこそ、心もとなうつきためれ。楊貴妃の、帝の御使にあひて泣きける顔に似せて『梨花一枝、春、雨を運びたり』などいひたるは、おほろげならじと思う、なほいみじうめでたきことは、たぐひあらじとおほえたり。

桐の木の花、むらさきに咲きたるはなほをかしきに、葉のひろごりざまぞ、うたてこちたけれど、こと木どもとひとしいふべきにもあらず。もろこしに名づきたる鳥の、えりてこれにのみゐるらむ、いみじう心ことなり。まいて琴に作りて、さまざまなる音の出で来るなどは、をかしなど世のつねにいふべくやはある、いみじうこそめでたけれ。

木のさまにくげなれど、棟（あふち）の花いとをかし。かれがれに、さまことに咲きて、かならず五月五日あふもをかし」

木に咲く花を記述する第三十五段を現代語訳すると、次のようになる。

「木に咲く花としては、色が濃いものでも薄いものでも、紅梅が素晴らしい。桜は花びらが大きく咲き、葉の色が濃く、枝が細いものがよい。藤の花は、花の房が長く、色濃く咲いたものがとても立派だ。

四月末、あるいは五月の初旬、夜中に雨が降った次の日の早朝など、橘の葉の色が濃い緑色で、真っ白い花が咲いている様子は、この世のものとは思えないほどだ。花の中に露が輝いているさまは黄金の玉のようで、夜明けの桜が朝露に濡れている美しさにもおとらない。また、橘はほととぎすと縁のある木と思うせいか、やはり何とも言えず素晴らしい。

梨の花は、ひどく興ざめのするものだから身近に置きもしないし、手紙に添えることさえしない。あまり愛敬のない人の顔などを見て、この花をたとえに出すものなるほどと思われる。葉の色から味気なく見えるが、唐の国（中国）では素晴らしいものとして、詩にも詠われている。本当にそれだけの理由があるのかと、改めてしっかりと見てみると、なるほど花びらの端に味わい深い色つやが、わずかについているようである。楊貴妃が帝の使いに会って泣いた顔にたとえて、『梨花が一枝、春の雨を運びているよ』と詠んでいることなどが

らすれば、確かに素敵な花なのかもしれない。

桐の花が紫に咲いているのはやはり風情があるが、葉が広がったさまは、仰々しく思われる。とはいっても、他の木と同じように平凡なものだとは言えない。唐（中国）の名高い鳳凰という鳥が、この木を選んでとまるというが、やはり別格である。まして、この木で作った琴から、さまざまな音色が出てくることなどを考えると、風情があると世間がいつも言うだけのことはあり、やはりとても素晴らしい。

木の形はあまりよくないが、棟（おうち）の花はとても味わい深い。枯れたように、少し変わった花が咲く。かならず五月五日頃に見られるというのにも風情がある」

このように、清少納言は花の中でも、まず木に咲く花の美しさを取り上げた。桜の花についていえば、国花であるだけでなくその名を冠した歌が数えきれないほど存在しており、私たち現代人にも非常になじみがある。桜なら、私たちが花の姿を思い描くことができる。

梅については、「梅は咲いたか、桜はまだかいな」という江戸端唄の歌詞をタイトルにした歌がある。⁽³⁾しかし、現代の日本人が皆、梅の花についてはっきりと思い描けるとはいえない。年配者ならば、藤の花も紫の枝垂れた花を思い描くことができるかもしれないが、若者であれば、梅の花も藤の花も知らない人の方が多いであろう。ましてや、橘、梨、桐などはどのような花なのか、私たち現代人にはなかなか想像できない。棟（おうち）に至っては、木の名前すら聞いたことがないだろう。

比較的なじみがある桜の花に対してさえ、私たちは清少納言のような研ぎ澄まされた眼差しを持ち合わせていない。なぜだろうか。その理由は、たとえば、木に咲く花に心を奪われる余裕が、現代人にはあまりないからであろう。あるいは、街中に暮らす者にとっては、身近な生活圏で、木に咲く花を見かけることが少なくなったからであろう。

木に咲く花に対して草の花、つまり草花の美しさについては、第六十四段で描写されている。この段では、なでしこ、桔梗、朝顔、刈萱（かるかや）、菊、壺堇（つばすみれ）、龍胆（りんどう）、萩、八重山吹、夕顔、すすきなどの美しさや風情が並べ記されている。

「草の花は なでしこ。唐のはさらなり、やまとのもいとめでたし。をみなへ

し。桔梗。あさがほ。刈萱（かるかや）。菊。壺堇（つぼすみれ）。

龍胆（りんどう）は、枝ざしなどもむつかしいけれど、こと花どものみな霜枯れたるに、いとはなやかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。また、わざととり立てて、人めかすべくもあらぬさまなれど、かまつかの花らうたげなり。名もうたてあなる。雁の来る花とぞ文字には書きたる。かにひの花、色は濃からねど、藤の花といとよく似て、春秋と咲くが、をかしきなり。

萩、いと色深う、枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれてなよなよとひろがりふしたる。さ牡鹿のわきて立ち馴らすらむも、心ことなり。八重山吹。

夕顔は、花のかたちも朝顔に似て、いひつづけたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、実のありさまこそ、いとくちをしけれ。などさはた生ひ出でけむ。ぬかづき（ほほずき）などいふもののやうにだにあれかし。されどなほ、夕顔といふ名ばかりはをかし。しもつけの花。葦（あし）の花。

これに薄（すすき）を入れぬ、いみじうあやしと人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは、薄こそあれ。穂先のすはうにいと濃きが、朝露に濡れて打ちなびきたるは、さばかりのものやはある。秋のはてぞ、いと見どころなき。色々にみだれ咲きたりし花の、形もなく散りたるに、冬の末まで、頭のいと白くおほどれたるも知らず、昔思ひ出顔に、風になびきてかひろぎ立てる、人にこそいみじう似たれ。よそふる心ありて、それをしもこそあはれを思ふべれ」

草の花についての第六十四段を現代語訳すると、次のようになる。

「草花でいうなら、なでしこがよい。中国のなでしこはもちろん、日本のなでしこも素晴らしい。女郎花（おみなえし）、桔梗（ききょう）、朝顔、かるかや、菊、つぼすみれなども素晴らしい。

りんどうは、壺などにさしにくい枝の形をしているが、ほかの花などが霜で枯れてしまっているのに、はなやかな色あいで飾られているのは、とてもよい。わざわざととり立てて言うほどではない花の様子ではあるが、かまつか（葉鶏頭）の花もかわいらしい。名前はあまりよくないが…。その花の近くに雁がやってくることがあると書物に書かれている。がんぴの花（藤もどき）は、色は濃くないが、藤の花とよく似ており、春と秋どちらも咲くのがおもしろい。

萩はとても色が深く、枝がしなやかに咲いているのが、朝露に濡れて、なよなよと広がり伏しているのがよい。小さい牡（おす）の鹿が特に親しんで近寄ってくるとかいうが、これもまた格別の味わいである。八重山吹も風情があ

る。

夕顔は、花のかたちも朝顔に似て、二つの名前を並べて言い続けたら、おもしろいに違いない花の姿なのに、夕顔の実は大きくて興ざめがして残念なことだ。なぜそのような運命でこの世に生まれてきたのだろう。せめてほおずきの実くらいの大きさであってくれればいいのに。しかしやはり夕顔という名前はおもしろい。しもつけの花や葦の花もよい。

これにすすきを入れないはいけない、と世間の人は言うだろう。確かに、秋の野原全体の風情といえ、やはりすすきだ。穂先が濃いすおう色（くすんだ赤色）で、朝露に濡れて揺れている様子は本当に趣深い。しかし秋の終わりの見ばえはよくない。色とりどりに乱れ咲いていた花が、無残に散ってしまい、冬の末には頭が真っ白になったのも知らず、風になびいて立っている様子は、人間によく似ている。誰かにたとえる気持ちがあるから、よけいあわれに思うのであろう」

木に咲く花と同様に、上記に描写されている草花の姿をすべて思い描くのも、現代人にとっては極めて難しい。若い世代であれば、朝顔くらいしか思い浮かべることができないのではないだろうか。その朝顔さえ、小学校で育てた時に見た、というような体験に限られているかもしれない。

一月七日に七草がゆを食べることはあるかもしれない。しかし普段の食事では、春の七草（なずな、はこべ、ごぎょう、せり、ほとけのざ、すずな、すずしろ）のうち、すずなに似たかぶとすずしろに似ただいこんが、食卓に並ぶことがあるかもしれないという程度であろう。

すすき（尾花）について、秋の景色として風になびく姿が描写されているが、秋の七草（萩、尾花、葛、撫子、女郎花、藤袴、桔梗）についても、現代社会の中で、私たちはほとんど意識することがない。

秋の七草の中で、撫子（なでしこ）については、「大和撫子（やまとなでしこ）」という言葉がある。日本人女性の美しさや奥ゆかしさ・りりしさなどを撫子の花にたとえており、歌のタイトルやテレビドラマのタイトルにも見られる⁽⁴⁾。しかし、現代社会においては、撫子の花がどのような花なのか、実物はもちろん絵や写真さえ目にする機会は限られている。

現代社会において、身近な植物に対して清少納言のような眼差しをもつものはほとんどいない。それは身近な植物が少なくなっただけでなく、それに目を向ける余裕も少なくなった現代という時代のせいでもあるだろう。

今をさかのぼること約1000年前の平安時代において、清少納言は、身近な植物の美しさや生命の輝きに目を見張り、息をのみ、心動かされていた。そして、その感性こそ「センス・オブ・ワンダー」である。『枕草子』に描写された植物の風情から、清少納言が豊かな「センス・オブ・ワンダー」のもち主だったと確認することができる。

（3）鳥や虫の描写

『枕草子』には、身近な植物についての描写と同様に、身近な動物である鳥や虫についても、そのおもしろさや趣が記されている。まず第三十九段では、種々の鳥について、そのありさまが描写される。

「鳥はことどころのものなれど、鸚鵡、いとあはれなり。人のいふらむことをまねぶらむよ。ほととぎす。くひな。しぎ。都鳥。ひわ。ひたき。

山鳥、友を恋ひて、鏡を見すればなぐさむらむ、心わかう、いとあはれなり。谷へだてたるほどなど、心ぐるし。鶴はいとこちたきさまなれど、鳴く声雲居まできこゆる、いとめでたし。

かしら赤き雀。斑鳩の雄鳥。たくみ鳥。

鶯は、いとみめも見苦し。まなこゐなども、うたてよろづになつかしからねど、『ゆるぎの森にひとり寝じ』と争ふらむ、をかし。水鳥、鴛鴦（おしどり）いとあはれなり。かたみにゐかはりて、羽の上の霜はらふらむほどなど。千鳥いとをかし。

うぐいすは、ふみなどにもめでたきものに作り、声よりはじめて、さまかたちも、さばかりあてにうつくしきほどよりは、九重のうちに鳴かぬぞいとわろき。人の『さなむある』といひしを、さしもあらじと思ひしに、十年ばかりさぶらひて聞きしに、まことにさらに音せざりき。さるは、竹近き紅梅も、いとよくかよひぬべきたよりなりかし。まかでて聞けば、あやしき家の見どころもなき梅の木などには、かしがましきまでぞ鳴く。よる鳴かぬもいぎたなき心地すれども、今はいかがせむ。夏秋の末まで老いごゑに鳴きて、『むしくひ』など、ようもあらむ者は、名をつけかへていふぞ、くちをししくすしき心地する。それもただ、雀などのようにつねにある鳥ならば、さもおほゆまじ。春鳴くゆゑこそはあらめ。『年たちかへる』など、をかしきことに、歌にもふみにも作るなるは。なほ春のうちならましければ、いかにをかしからまし。人をも、人げなう、世のおほえあなづらはしうなりそめにたるをば、そしりやはする。鶯・

鳥などのうへは、身入れ、聞き入れなどする人、世になしかし。されば、いみじかるべきものとなりたれば、と思ふに、心ゆかぬ心地するなり。

祭りのかへさ見るとて、雲林院・知足院などの前に車を立てたれば、ほととぎすも、しのばぬにやあらむ、鳴くに、いとようまねび似せて、木高き木どもの中に、もろ声に鳴きたるこそ、さすがにをかしけれ。

ほととぎすは、なほさらにいふべきかたなし。いつしかしたり顔にもきこえたるに、卯の花、花橘などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり。

さみだれの短き夜に寝ざめをして、いかで人より先に聞かむと待たれて、夜深くうち出でたる声の、らうらうじう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せむかたなし。六月になりぬれば、おともせずなりぬる、すべて、いふもおろかなり。

よる鳴くもの、なにもなにもめでたし。ちごどものみぞさしもなき」

鳥の「をかし」さについて描写されている第三十九段を現代語にすると、次のようになる。

「異国のものだけれど、鳥といえは鸚鵡（おうむ）の風情が心に染み入る。鳥であるのに、人の言葉の真似をするのだという。ほととぎす、くいな、しぎ、みやこ鳥（ユリカモメ）、ひわ、ひたきなどもおもしろい。

山鳥は、鏡を見ると友だと思慰められるらしいが、その純粹さに心打たれる。別々に谷をへだてている時などは、心が痛む。鶴はたいそううるさいが、鳴き声が雲にまで聞こえるようで、とても立派な声だ。

頭が赤い雀、いかるがの雄鳥、たくみ鳥（きつつき）なども風情がある。

さぎは、見た目もあまりいただけない。目つきもよくないし、親しみを感じられない鳥だが『（滋賀県にあった）ゆるぎ（万木）の森で一人寝はしない』と歌われているようにメスをめぐって争うらしい、それがおもしろい。水鳥ではおしどりがしみじみとしている。雄雌が交互に場所を変えて、互いの羽の上の霜を払うほどに仲がいい。千鳥も、趣がある。

うぐいすは漢詩の文などにも登場し、声をはじめ姿かたちも愛らしいといわれているのに、宮中では鳴かないというのは本当だろうか。

人がそのようには言うが『まさかそんなことはないだろう』と思っていたところ、十年ほど宮中に奉公してきいたところ、本当に全く鳴かなかった。近く

には竹や紅梅もあり、うぐいすが通ってくるだろうと思われるところであったのにもかかわらずだ。その後に宮中を退出してきくと、貧祖な家の大したことのない梅の木などでは、うぐいすがうるさいほどに鳴いている。夜鳴かないのも、ちょっとどうかと思われるが、それもいたしかたがない。夏秋の終わりごろまで、老いた声で鳴いて、『むしくい』などと下世話に名前をつけかえて言う者がいるのも、残念で奇妙な感じがする。それもただ、雀などのように、いつもいる鳥ならば、そのようにも思われなくだろうに。春だけ鳴くからだろう。『新しい年になる』など、風情があることにつけて、歌や詩として詠まれるのである。それも、春のうちであれば、どんなにすばらしいであろうか。人の場合も、同様である。旬の過ぎたような人を、誰がとり立てて悪く言ったりするだろうか。鳶（とんび）や烏（からす）などであれば、目をさらにして悪いところを探そうなどとは決してしない。しかし、うぐいすに限っては、他の鳥とは別格の立派な鳥であってほしいのだ。だからこそ、うぐいすの現実の様子に不満を覚えてしまう。

葵祭（あおいまつり）の帰りの行列を見ようと、雲林院（うりいん）や知足院（ちそくいん）などの前に牛車を止めていると、ほととぎすも、静かにはしていられないのか、鳴き始める。その声は、うぐいすによく似て、小高い木などの中で、複数の鳥と一緒に鳴いているのは、本当に風情があり、聞きほれてしまう。

ほととぎすは、またさらに言いようがないほど、すばらしい。いつ鳴くかと待っていると、いかにも誇らしげに鳴く声が聞こえ、ウツギの花や花橘（はなたちばな）の中に場所を見つけ、姿を隠しているのも、ちょっと生意気な感じがする。

五月雨の短夜（夏の短い明けやすい夜）に、ふと目が覚めて、何とかして人より先に、ほととぎすの鳴き声を聞きたいと待っていると、夜深くに鳴き始めた声が、上品で愛敬がある。その声に、心焦がれ、心揺さぶられる。本当に、どうしようもなく素晴らしい。六月になると、音もしなくなってしまう。それらのことがすべて、言葉にできないほど、趣深い。

夜鳴くものは、何もかもすばらしい。しかし、赤ん坊については、そうでもない」

鳥の鳴き声について、私たち現代人には、どのくらいの知識があるだろうか。うぐいすが「ホーホケキョ」と鳴くことを知っている人はいるだろうが、その

鳴き声を生で聞いたことのある人はそれほど多くないはずである。「うぐいす色」という色の名前はうぐいすの羽根の色であるが「うぐいす色」をしたうぐいすの姿を生で見たことのある人は、さらに少ないだろう。

ほととぎすについては、うぐいす以上になじみが薄くなる。ましてや街中に住んでいる人であれば、その鳴き声を聞いたり、その姿を見たりしたことのあ

る人は、ほとんどいないのではないだろうか。

街中に暮らす私たちの身近にいる鳥といえば、雀（すずめ）や烏（からす）である。私たちが、意識してその鳴き声に聞き耳を立てることはあまりない。

平安時代は、人間の生活圏内に多様な鳥たちが暮らしていた。くいな、ひわ、ひたきなど、私たちが名前も知らないような鳥たちの姿や鳴き声に、清少納言の心はときめき、震えたのである。

さらに第四十一段では、虫についての観察と鑑賞がなされている。

「虫は　すずむし。ひぐらし。蝶。まつむし。きりぎりす。はたおり。われから。ひを虫。ほたる。

みのむし、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似てこれもおそろしき心あらむとて、親の、あやしききぬ引き着せて、『今、秋風吹かむをりぞ来むとする。待てよ』といひおきて、逃げて往にけるも知らず、風のおとを聞き知りて、八月ばかりになれば、『ちちよ、ちちよ』とはかなげに鳴く、いみじうあはれなり。

ぬかづき虫、またあはれなり。さる心地に道心おこしてつきありくらむよ。思ひかけず、くらきところなどに、ほとめきありきたるこそをかしけれ。蠅こそ、にくきもののうちにいれつべく、愛敬なきものはあれ。人々しう、かたきなどにすべきものの大きさにはあらねど、秋など、ただよろづのものにゐ、顔などに、ぬれ足してゐるなどよ。人の名につきたる、いとうとまし。

夏虫、いとをかしうらうたげなり。火近うよりよせて物語など見るに、草子の上などに飛びありく、いとをかし。蟻は、いとにくけれど、かるびいみじうて、水の上などを、ただあゆみにあゆみありくこそをかしけれ」

この第四十一段を現代語にすると、次のようになる。

「虫で風情があるものといえば、鈴虫（今でいう松虫）である。ひぐらし、蝶、

松虫（今でいう鈴虫）、きりぎりす（今でいうこおろぎ）、はたおり（今でいうきりぎりす）、われから（海藻に付いている小虫）、ひおむし（カゲロウの類）、蛸もよい。

みの虫は、とてもあわれだ。鬼が生んだといわれ、鬼に似た恐ろしい心があるのだろうと思われ、親が変な衣服を着せて『もうすぐ秋風が吹くからそのころに来るから、待っていなさい』と言い置いて逃げて行ったことも知らずに、風の音を聞き知って、八月頃になると、『ちちょ、ちちょ』とはかなげに鳴くのが、本当にかわいそうだ。

ぬかづき虫（米につく虫）もまた、虫なのに信心を起こしてか、額づき（拝むように伏して）動くとは、あわれなものだ。思いがけず、暗いところなどを、ほとほとと移動しているのもおもしろい。蠅こそは、にくいものであり、愛敬もない。人なみに敵として扱うほどの大きさではないけれど、秋など、ともかくいろいろなものにとまり、顔などにも、濡れた足でとまるなどは困ったものだ。人の名前で、蠅という字がついているのも、非常に疎ましい。

夏虫（夏の夜、灯火に寄ってくる虫）は、とても風情がありかわいらしい。灯火を近くに持ってきて、物語などを読んでいる時に、冊子の本の上などに飛びまわるのがとてもおもしろい。蟻は、とてもにくらしい姿ではあるけれど、非常に軽くて、水の上などを自由にさっさと歩くのがおもしろい」

このように清少納言は、花の美しさに続き鳥や虫などの「をかし」さを事細かく描写した。彼女は風や雨など自然そのものの「をかし」さだけでなく動植物の「をかし」さも感じ取るセンサーをもっていた。

それは視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五つの感覚、すなわち五感である。身の回りにあるさまざまな人・物・事からの刺激を受け止めることのできるみずみずしい感性、すなわち「センス・オブ・ワンダー」を清少納言はもちあわせていた。日々の暮らしの中で、この感性はさらに磨かれていったのだろう。清少納言のこの感性こそが、平安時代の傑作『枕草子』を生み出した。

五感への刺激について、レイチェル・カーソンは次のように言っている。

「子どもといっしょに自然を探検するということは、まわりにあるすべてのものに対するあなた自身の感受性にみがきをかけるということです。それは、しばらくつかっていなかった感覚の回路を開くこと、つまり、あなたの目、耳、鼻、指先のつかいかたをもう一度学び直すことなのです。」

（４）小さきものへの慈愛の描写

そもそも「センス・オブ・ワンダー」とは、生命や自然の美しさや不思議さに驚く感性のことであるが「ワンダー（Wonder）」は「驚き」と訳することができる。清少納言は『枕草子』第二十七段で、胸がときめいたり、はっと驚いたりするものについて語りを続けている。

「心ときめきするもの。雀の子飼。ちご遊ばするところの前わたる。よき薫物たきてひとり臥したる。唐鏡のすこしくらき見たる。よき男の車とどめて案内し、問わせたる。

かしら洗い、化粧（けさう）じて、かうばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人なきところにも、心のうちはなほいとをかし。待つ人などのある夜、雨の音、風の吹きゆるがすも、ふとおどろかる」

清少納言はどんなものに胸がときめき、どんなものに驚いたのか。第二十七段では、二つの例が挙げられている。その第二十七段を現代語にしてみると、次のようになる。

「胸がドキドキして心がときめくものといえば、ペットとして飼われている小雀である。家で飼われている小雀の様子を見ると、本当にかわいらしく胸がときめく。小さい子どもを遊ばせている前を通る時も、その様子に心奪われドキドキする。上等のお香を焚いて、ひとり寝床で休んでいる時も心がときめく素敵な時間だ。輸入された鏡に少し曇りが見えるのにも、心奪われる。自分の家の門の前に、立派な男性が牛車を止めて、従者に何か尋ねさせているのも、心ときめく。

頭髪を洗い、化粧をして、しっとりと香りのしみた着物などを着ている時も、胸がときめく。特に人が見ていないような場所でも、心の内では、やはりドキドキしている。来てくれる予定がある男性を待っている夜などは、雨の降る音や風の吹き揺るがす音にも驚かされる。待っている人が来たのかと、いちいち心ときめき胸が高なるものだ」

まず、家で飼っている小雀や遊んでいる乳幼児の様子に心がときめくと描写される。さらに、男性を待っている夜、雨や風の音がすると、その男性が来たのではないかと胸が高なるという。この二つのことから、小さきものへの関心

と異性である男性への関心が、清少納言の胸をときめかしたり、心を驚かせたりする、二つの主要原因であったと推察できる。

『枕草子』の第二十七段では、胸がときめいたり、はっと驚いたりするものが記されていた。その一つが小さきものへの関心であった。清少納言のもつ小さきものへの慈愛が表現されている段がある。第百四十六段である。第百四十六段には、次のように記されている。

「うつくしきもの　うりにかきたるちごの顔。雀の子の、ねず鳴きするにをどり来る。二つ三つばかりなるちごの、いそぎてはひ来る道に、いとちひさき塵のありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。かしらはあまそぎなるちごの、目に髪のおほえるを、かきはやらで、うちかたぶきてものなど見たるも、うつくし。

大きにはあらぬ殿上童（わらは）のさうぞきたてられてありくも、うつくし。をかしげなるちごの、あからさまにいだきて遊ばしうつくしむほどに、かいつきて寝たる、いとらうたし。

ひひなの調度。はちすの浮葉のいとちひさきを、池より取りあげたる。葵のいとちひさき。なにもなにも、ちひさきものは、みなうつくし。

いみじう白く肥えたるちごの、二つばかりなるが、二藍のうすものなど、衣ながにて、たすき結ひたるが、はひ出でたるも、また短きが袖がちなる、着てありくも、みなうつくし。八つ、九つ、十ばかりなどのをのこ児の、声はをさなげにてふみ読みたる、いとうつくし。

にはとりのひなの、足高に、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよひよとかしがましう鳴きて、人のしりさきに立ちてありくもをかし。また親の、ともにつれてたちて走るも、みなうつくし。かりのこ。舍利の壺」

当時の「うつくし」は「美し」ではなく、「愛（うつ）くし」で、愛らしいの意味であった。つまり、第百四十六段は、愛らしいもの、可愛らしいものが紹介されていく。現代語にすると、次のようになる。

「愛らしいものといえば、瓜に幼児の顔を描いたものである。雀の子がちゅんちゅんと鳴きながら踊ってくる様子も愛らしい。また、二、三歳の幼児が、急いで這ってくる途中で床に小さい塵があるのを見つけ不思議そうに指でとらえて大人に見せる様子も、非常に可愛らしい。さらに、肩のところで切りそろえ

た髪型の幼児が、目に前髪がかかるのを手で払わず、首をかしげて何か見ている様子も可憐である。

元服前に殿上に奉仕する摂政関白の子弟が、着飾られて歩く様子、美しい幼児が抱かれあやされているうちに抱かれたまま寝てしまった様子もかわいい。

人形の道具類、池に浮いた小さな蓮の葉を取りあげたもの、葵のごく小さいものなど、何もかも小さいものは、みんな愛らしい。

とても色白でぽっちゃりした二歳くらいの幼児が、藍と紅とで染めた織物の薄い着物が長く、ひもで袖をくくってあるのに這い出すとまた手が短く袖だけが長いままの着物を着て歩くのも、みんな愛らしい。八歳か九歳か十歳くらいの男の子が、幼げな声で本を読んでいるのも可愛らしい。

鶏のひなの足が長くて白く、着物が短いような様子でひよひよとうるさく鳴いて人の後ろに立って歩くのも趣がある。また親鳥と一緒に連れて、先に立って走るのも、みんな愛らしい。あひるや鶯鳥の卵、舍利の骨壺も可愛らしい」

この段では、清少納言のもつ小さきものへの慈愛の念が感じられる。人間の子どもだけではなく、動物の子どもなど、小さいもの弱いものを包み込むようなまなざしが「何もかも小さいものは、みんな愛らしい」という言葉から読み取れる。小さきものを「愛」し、「慈しみ」、「愛（め）でる」心も、「センス・オブ・ワンダー」の一つの現れではないだろうか。

以上、『枕草子』の中に清少納言の「センス・オブ・ワンダー」がどのように表現されているかについて、検討を重ねてきた。その結果、『枕草子』には、自然や生命の美しさや不思議さに驚く感性「センス・オブ・ワンダー」が表出していることが明らかになった。中でも、「うつくしきもの（愛らしいもの）」として、人間の子どもや小さきもの、あるいは弱きものへの慈愛が描写されていた。そこで『枕草子』の第百四十六段にみられる小さきものへの慈愛について、「センス・オブ・ワンダー」の視点からもう少し掘り下げてみたい。

3. 「センス・オブ・ワンダー」と小さきものへの慈愛

（１）レイチェル・カーソンによる鳥や虫の描写

『枕草子』に描かれた四季折々の自然、木に咲く花や草花、鳥や虫などの様子は、清少納言の感性「センス・オブ・ワンダー」が表現されたものである。カーソンの『センス・オブ・ワンダー』にも、極めて類似した描写が見られる。

たとえば、虫の鳴き声に関する、次のような描写がある。

「生きものたちが奏でる音楽は、このほかにもあります。私はロジャーと、⁽⁵⁾秋になったら懐中電灯をもって夜の庭にでて、草むらや植えこみや花壇のなかで、小さなバイオリンを弾いている虫たちをさがそうと約束しています。

虫のオーケストラは、真夏から秋の終わりまで、脈打つように夜ごとに高まり、やがて霜がおりる夜がつづくと、か細い小さな弾き手は凍えて動きが鈍くなっていきます。そして、とうとう最期の調べを奏でると、長い冷たい冬の静寂のなかへひきこまれていきます。

懐中電灯をたよりに小さな音楽家をたずね歩くひとときの冒険は、どんなこどもも大好きです。彼らは、しゃがみこんで目をこらし、じっと待っているあいだに、夜の神秘性と美しさを感じ取り、夜の世界がいかに生き生きとしているかを知るのです。…

あなたがたはきっと、快い高音でいつまでもくりかえされる音色にひかれて、一步一步茂みに近づいていくことでしょう。そしてついに、月の光のようにはかなく白い羽をもった薄緑色の小さな虫を見つけるのです。

庭の小道に沿ったあたりからは、楽しそうなりズミカルな、ジーツ、ジーツという音がきこえてきます。それは、暖炉で薪がはじける音や、猫がのどを鳴らす音と同じように、なじみ深い家庭的なひびきです。懐中電灯を下にむけると、黒いケラが草むらのすみかに急いで姿を隠すのが見えるでしょう。

なかでも心ひかれてわすれられないのは『鈴ふり妖精』とわたしがよんでいる虫です。わたしはまだ一度もその虫をみたことはありません。それにほんとうのところは、あいたいと思っていないのかも知れません。彼の声は一きくと姿もそうにちがいないと思うのですけれども—この世のものとも思えないほど優雅でデリケートです。わたしは、これまでにいく晩も彼を見つけようとしてきましたが、けっして姿をあらわしてはくれませんでした。

ほんとうにその音は、小さな小さな妖精が手にした銀の鈴をふっているような、冴えて、かすかで、ほとんどききとれない、言葉ではいいあらせない音なのです。この鈴の音がすると、どこからきこえてくるのだろうと、息をこらして緑の葉影のほうに身をかがめてしまいます」

小さな虫たちの様子や鳴き声が、事細かに、慈しむように描写されている。また、鳥の鳴き声に関する次のような描写もある。

「鳥たちの最初の声は、太陽が顔をだすまえにきこえてきます。独りぼっちの最初の歌い手の声をきき分けるのはたやすいことです。まず赤いカーディナル（和名ショウジョウコウカンチョウ）が、澄んだかん高い笛のような声で歌いはじめるでしょう。

それから次に、ノドジロシトドが天使のようにけがれのない歌声をひびかせ、夢のような、わすれることのできないよろこびをもたらしてくれます。

すこしはなれた森では、ヨタカが単調な夜の歌を歌い続けています。リズムカルな特徴のあるその声音は、きこえてくるというより、感じるといったいいようなものです。

やがて、コマツグミ、モリツグミ、ウタスズメ、カケス、モズモドキたちが合唱に加わってきます。朝のコーラスは、コマツグミの数がふえるにつれてボリュームをあげ、そのうちにコマツグミの迫力あるリズムが、自然の混成曲（メドレー）をリードするようになっていきます。

この明け方のコーラスに耳をかたむける人は、生命の鼓動そのものをきいているのです」

鳥の声については、渡り鳥の声についても記されている。

「夜には、またべつの声もきこえてきます。春には北へむかい、秋になると南へ急ぐ渡り鳥たちがよびかわす声です。

風のない穏やかな十月の夜、車の音がとどかない静かな場所に子どもたちをつれていき、じっとして頭上にひろがっているくらい空の高みに意識を集中させて、耳を澄ましてみましょう。やがて、あなたの耳はかすかな音をとらえます。鋭いチッチッという音や、シュツシュツというすれ合うような音、鳥の低い鳴き声などです。

それは広い空に散って飛びながら、なかま同士がはぐれてしまわないようによびかわす渡り鳥の声なのです。

わたしは、その声をきくたびに、さまざまな気持ちのいりまじった感動の波におそわれずにはいません。わたしは、彼らの長い旅路の孤独を思い、自分の意志ではどうにもならない大きな力に支配され導かれている鳥たちに、たまらないとおしさを感じます。また、人間の知識ではいまだに説明できない方角や道すじを知る本能に対して、湧きあがる感嘆の気持ちをおさえることができません。」

（２）小さきものへの慈愛とは

カーソンが描写する虫は「小さな小さな妖精」で、その音色は「この世のものとも思えないほど優雅でデリケート」なもの、だという。「鈴ふり妖精」と名づけられたその虫の音色が「なかでも心ひかれてわすれられない」。カーソンのこの観察眼は、『枕草子』第四十一段で「虫はすすむし…」と次から次へと描写されていく虫についての清少納言の観察眼と同様のものである。

さらに、さまざまな鳥たちの声についての描写についても、やはり同じことが言える。『枕草子』の第三十九段で清少納言は、鸚鵡からほととぎすまでたくさんの鳥たちの「をかし」さを紹介していた。鳥たちに対する共通の眼差しを、カーソンと清少納言はもちあわせている。カーソンは渡り鳥の鳴き声に「たまらないとおしさを感じ」、清少納言は、ほととぎすの鳴き声に、「心焦がれ、心揺さぶられ…本当に、どうしようもなく素晴らしい」と絶賛するのである。

もともと海洋生物学者であったカーソンは、さまざまな生物の生態について非常に詳しい知識をもっていた。カーソンには科学者としての観察眼をいかした多くの著書がある。最も有名なものが、環境問題の古典とされている『沈黙の春』（1962）である。殺虫剤や農薬など化学物質の危険性を訴えたこの作品のタイトルは、春になっても鳥たちが鳴かなくなったという状況を示している。

カーソンが最後に残した作品である『センス・オブ・ワンダー』は、姪の息子であるロジャーと自然の中を散策し、小さな生き物たちの世界と一緒に味わった、その日々のできごとを綴ったエッセイである。二人が出会った虫や鳥、木に咲く花や草花などの動植物は、人間からすれば「小さきもの」である。それら「小さきもの」への関心、好奇心が「センス・オブ・ワンダー」であり、それはさらに「小さきもの」への慈愛へと発達するものなのだろう。

このエッセイの内容そのものが、小さなロジャーを慈しみ愛する、カーソンの行動の記録である。鳥や虫など小さく弱いものたちへの慈愛のこもった眼差しの最も奥深くに、ロジャーへの慈愛が満ちている。子どもの発達には「センス・オブ・ワンダー」を育むことが重要で、そのためには子どものそばにいる大人が、子どもと一緒に「センス・オブ・ワンダー」を磨かなければならない、とカーソンは訴えている。『センス・オブ・ワンダー』は親に向けた啓蒙書であり、哲学書でもある。「センス・オブ・ワンダー」と「小さきもの」への慈愛の関係をふまえて、保育者の資質の一つとしての「センス・オブ・ワンダー」について論を進めていく。

4. 保育者の資質・能力の一つとしての「センス・オブ・ワンダー」

(1) 幼児教育における保育者の役割

『枕草子』から「センス・オブ・ワンダー」について考察する中で、レイチェル・カーソンや清少納言がもっていた「小さきもの」への慈愛の念を確認することができた。保育者には、「小さきもの」への慈愛を含めた「センス・オブ・ワンダー」が必要であると思われる。

保育内容領域環境の指導法の教科書として使われている著書『演習保育内容環境—基礎的事項の理解と指導法—』の中で、岡健は、幼児教育における「センス・オブ・ワンダー」の重要性について、何度も言及している。前回の論考（福田2022）では、「センス・オブ・ワンダー」を育むことが、乳幼児の発達により影響を及ぼすという観点に注目して、岡健の著書を引用・参照しながら論を展開した。本稿においては、乳幼児のもつ「センス・オブ・ワンダー」ではなく、保育者のもつ「センス・オブ・ワンダー」について、岡健のこの著書を引用・参照して、さらに考察を深めていきたい。

岡健は第12章で「環境とのかかわりを支える保育者の役割」について論じている。その中で、保育者の役割として次の2つを提示した。

①教材を工夫し、物的・空間的環境を構成する役割

②人的環境として、子どもとやりとり等をする役割

①と②に関し『幼稚園教育要領』（2017）に次のような記載がある。

「幼稚園教育においては、…。…教師には、幼児の自発的な活動としての遊びを生み出すために必要な教育環境を整えることが求められる。さらに、教師には、…幼児と共によりよい教育環境をつくり出していくことも求められている。そのための教師の役割は、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成する役割と、その環境の下で幼児と適切な関わりをする役割とがある。」

前の波線が①の役割、後の波線が②の役割に相当する。①は環境構成を整える役割であり、②は人的環境として幼児とやりとりをする役割である。幼児教育における保育者のこの2つの役割のうち、①は間接的な幼児と関わりになるが、②は直接的な幼児との関わりである。①において、保育者のもつ「センス・オブ・ワンダー」はもちろん重要ではあるが、②においては、保育者のもつ「センス・オブ・ワンダー」がさらに重要になってくる。そこで、②の「人的環境として、子どもとやりとり等をする役割」に焦点を当てて、保育者のもつ「センス・オブ・ワンダー」について、さらに検討してみたい。

(2) 人的環境としての保育者のもつべき技能（スキル）

岡健は人的環境としての保育者の役割を論ずる中で、保育者自身が研究会でまとめた技能（スキル）を、保育者のもつべき資質の一つとして紹介している。それらは次の8つの技能（スキル）であるという。

- ①ユーモアと遊び心をもってしかける。
- ②子どもの目の前で作業する。
- ③保育者自身が積極的に虫や不思議などに出会う。
- ④言葉をかけるよりも、表情だけで思いを受け止めたり伝えたりする。
- ⑤保育者からも発見、不思議、感動を子どもに伝える。
- ⑥保育者からも、“もうっかい” “もっ” を子どもに伝える。
- ⑦子どもと同じ目線になり、驚き、不思議、発見、感動を共有する。
- ⑧子どもの心が動かされる前に、保育者の心が動いている。

これら8つの技能（スキル）はすべて、子どもの「センス・オブ・ワンダー」が育まれるために必要なことである。さらに、①③④⑤⑥⑦⑧に関しては、保育者が自分自身の「センス・オブ・ワンダー」を磨くことにより身につく資質であるともいえる。幼児教育に携わる者は、子ども時代のように、自然や身近な動植物の生命の美しさや不思議さを楽しむ心が必要である。そのことを、これら8つの技能（スキル）は示している。

以上からわかることは、子どもの「センス・オブ・ワンダー」を育むためには、保育者が自分自身の「センス・オブ・ワンダー」を育んでおかねばならないということである。保育者自身のもつ「センス・オブ・ワンダー」の本質的部分が子どもへの慈愛なのかもしれない。

5. おわりに

『枕草子』では「小さきもの」として、動植物などさまざまなものが列挙されていた。「小さきもの」の代表的なものが、人間の子どもである。「小さきもの」そして「弱きもの」である乳幼児に対する眼差しこそ、レイチェル・カーソンや清少納言の「センス・オブ・ワンダー」の中核に位置づけるのではないだろうか。「センス・オブ・ワンダー」が豊かに磨かれることによって、さらにその眼差しが、小さいものや弱いものへの慈愛に満ちていくのかもしれない。

自然や生命の美しさや不思議さに驚く感性「センス・オブ・ワンダー」の中核として「小さきものへの慈愛」が位置けられるとすれば、それは、人間の乳

幼児に対する慈愛が含まれる。そして、それを保育や幼児教育に携わる者もちわせていることは、必然ともいえる。

幼児教育における「センス・オブ・ワンダー」については、子どもの「センス・オブ・ワンダー」を育むことと、保育者自身が自らの「センス・オブ・ワンダー」を磨くことと、両側面から考えてゆくことが求められる。それは、言いかえるなら、子どもの「センス・オブ・ワンダー」が発達するには、保育者自身が豊かな「センス・オブ・ワンダー」を身につけていなければならない、ということでもある。

注

- (1) 〈引用・参考文献〉の福田豊子（2022）のことである。この論考では、同じテーマを、命の不思議へのまなざしに焦点を当てて考察した。
- (2) 現代語訳に関しては、引用文献の池田、佐藤による訳を使わず、福田が訳した。この文献が出版された1972年から、すでに半世紀が経過しているからである。
- (3) 2007年に発売された、女性レゲエシンガーソングライターMetisのシングルの曲である。
- (4) 歌としては、1984年にリリースされた小泉今日子の歌謡曲（J-POP）『ヤマトナデシコ七変化（しちへんげ）』がある。テレビドラマとしては、2000年にフジテレビ系で放映された松嶋菜々子主演の『やまとなでしこ』がある。また、少女漫画雑誌『別冊フレンド』2000年4月号から2015年2月号まで少女漫画『ヤマトナデシコ七変化』が連載された。その少女漫画をもとに2006年から2007年にかけて放映されたテレビ東京系のテレビドラマ『ヤマトナデシコ七変化』もある。
- (5) ロジャーは、カーソンの姪の息子である。この著書の中では甥と書かれている。幼児期にカーソンの海辺の家で、一緒に暮らした。

〈引用・参考文献〉

- ・岡健（2019）『演習保育内容環境—基礎的事項の理解と指導法—』建帛社
- ・清少納言・吉田兼好、池田亀鑑、佐藤春夫訳（1972）『枕草子・徒然草』新学社 教友館
- ・福田豊子（2022）「幼児期における『センス・オブ・ワンダー』（1）—命の不思議へのまなざし—」『龍谷大学論集』498号
- ・文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』フレーベル館
- ・レイチェル・カーソン、上遠恵子訳（1996）『センス・オブ・ワンダー』新潮社

キーワード 幼児教育、センス・オブ・ワンダー、子どもへの慈愛